

日本によるアフガニスタン仏教遺跡の調査



入澤 崇

龍谷大学文学部教授・龍谷ミュージアム副館長

龍谷大学の入澤です。

日本はこれまでアフガニスタンの考古学に大きな貢献をしております。とりわけ名古屋大学や、樋口隆康先生を中心とした京都大学によるバーミヤーンの遺跡調査は極めて重要なものです。

2005 年から龍谷大学がアフガニスタンの仏教遺跡調査に乗り出しました。

アフガニスタン中央部では、バーミヤーン地区が仏教の伝わった西の端とみなされており、ところが 2003 年にその見方を変える出来事がありました。バーミヤーンのはるか西から仏教遺跡並びに仏教信仰を記した碑文資料 (inscription) が確認されたのです。これを受けて龍谷大学が調査を開始いたしました。

まず、龍谷大学出身でフリーカメラマン中淳志 (なか・あつし) 氏によって発見された仏塔 (stūpa) を紹介しましょう。バーミヤーンの西 150 キロの地点ケリガン (Keligan) という場所で発見されました。仏塔は高さ約 10m、直径約 8m です。さらにケリガンから北西に進むとイスラーム期の城砦遺跡チル・ボルジ (Chehel Burj) があって、仏教施設の可能性がある建造物と壁画跡が確認されたのです。これについては後で紹介いたします。

同じく 2003 年には (図 1)、さきほどのケリガンから南へ 25 キロのタンギ・サフェーダック (Tang-e Safedak) という所にも関心が集まる事態が生じました。

タンギ・サフェーダックから出土したバクトリア語碑文 (Bactrian inscription、図 2) がイギリスのニコラス・シムズ＝ウィリアムズ (Nicholas Sims-Williams) 教授によって解読されたのです。注目すべき事実がそこに記されていました。

その碑文に 8 世紀前半に地方領主によって仏塔 (stūpa) が建立されていたことが記されていたのです。バーミヤーンより西で仏塔信仰を示すまぎれもない証拠であり、8 世紀という年代から、バーミヤーンとの関連を十分にうかがわせます。

この碑文はさらに重要な事柄を語っています (次頁碑文翻訳参照)。「アラブの支配者」という文言に注目すべきです。仏塔はアラブの支配者がいる時期に建立されたものです。「アラブの支配者」、つまりイスラーム勢力が 8 世紀初頭にこの地に及んでいたのです。この碑文は、イスラーム勢力が支配する中で、仏教がなお信仰されていたことを示すものであり、「イスラームと仏教との出会い」について再考を促す実に貴重な資料です。



図1

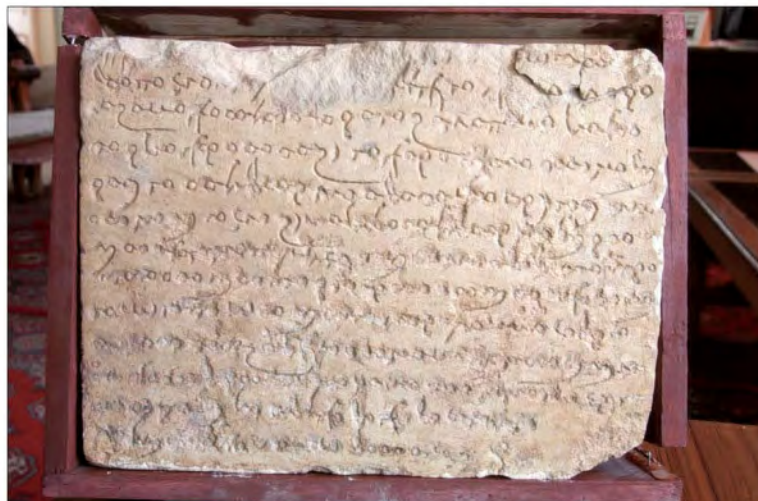


図2

【バクトリア碑文の翻訳】

492 年(724 年)のsbol月、私こと Khuras の息子、Gazanの領主Alkhisは、このストウーパをRagzamaganの地に奉獻物として建立した。Turkの支配者とArabの支配者がいる時期においても、私によってつくられたdeyadharm(功德ある施物)は維持された。・・・そしてさらに私はこのZinalaka-deyadharm(ストウーパ)を、ブッダの教えと深い信仰・・・。今も将来も、あらゆる福德が私 Alkhis、わが両親、妻、兄弟、息子、親族にあれかし。われら全てのそれぞれの望みをかなえよ。ブッダに帰依し奉る。

これらの仏教遺跡・仏教文物はバンデ・アミール川流域に存在し（図3）、この地域に対する関心がいやがうえにも高まっていったのです。2004年の予備調査を経て、2005年2月に龍谷大学は情報文化省に属するアフガニスタン国立考古学研究所（Afghanistan Archaeology Institute）と学術共同調査に関する協定を締結し、さらに2005年にはユネスコとも協定を結び、ユネスコ・カーブル事務所の全面的支援を得て、バーミヤーンより西の調査が実施される運びとなったのです。

まず私たちが最初に目指したのが、タンギ・サフェーダック（Tang-i Safedak）でした。残念ながら遺跡は完全に破壊されており、遺跡の見つかった1996年の時点では確認できたストゥーパの基壇部もいまはわずかにその痕跡が確認できるのみでした。

ケリガンに現存するストゥーパ、タンギ・サフェーダックにかつて存在したストゥーパ。仏塔に対する信仰はまぎれもなくバンデ・アミール川流域に及んでいました（図4）。

バンデ・アミール川はアジア一美しいといわれる湖バンデ・アミールを源流とする川です（図5）。バンデ・アミール湖の「青さ」はこれまたアフガニスタンの貴重な財産です。ケリガンに残っていた仏塔（図6）はアフガニスタン東部で19世紀に見つかった仏塔のスタイルと同様のものです（図7）。

仏塔（stūpa）の他にさらに注目すべきは石窟（cave）です。ここで、先に少しだけふれたチル・ボルジ（Chehel Burj）を紹介いたします（図8、9）。ケリガンの遺跡西北7キロ地点の、バンデ・アミール川左岸、約100mの絶壁上にチル・ボルジ（Chehel Burj）というイスラーム期の城砦遺跡があります。チル・ボルジとは、「40（チル）の望楼（ボルジ）」という意味で、崩れた望楼が30数基残存しています。壮大な城砦遺跡であるにもかかわらず、本格的な考古調査は行なわれておりません。アフガニスタンを代表する城砦遺跡といっても過言ではありません。この遺跡もいまは倒壊の危機にさらされております。



図3



図4



图5



图6



图7



图8



图9

城砦を西南側に降りたところに石窟が確認できました(図 10)。9つの石窟が存在し、中央部にあるひとつの石窟は龕(niche)があり、明らかに礼拝像を安置していたと思われる構造を示していました(図 11)。

2005年の調査では(図 12)、ケリガンとチルボルジとの間にこれまで報告されていなかった石窟を確認いたしました。サレスム(Sar-e Sum)石窟といいます。内部で繋がる4層構造で、7つの石窟が存在しておりました(図 13)。

龕の形状、そしてケリガン仏塔の近さからみて、龕は仏教のものであり石窟全体は仏教石窟とみるのが妥当と判断します(図 14)。小ぶりではありますが、第4層目にある龕が一番完全な形をとどめております。

もう一度、チル・ボルジに戻りますが、石窟を背にして城砦部に登りますと、城砦東側頂上近くに祠堂群があります(図 15、16)。ただし、大量の土砂が堆積していて、祠堂群の全体像はわかりません。いくつかの祠堂の中には壁画が残存していました(図 17)。いま見ていただいているのは、大変稚拙な壁画ですが、ササン朝の貴族がつける冠、頭からリボン状のものをたなびかせているのがわかります。この人物のスタイルは実はパーミヤーンの壁画の中にも見られます(図 18)。



図 10



図 11



図 12

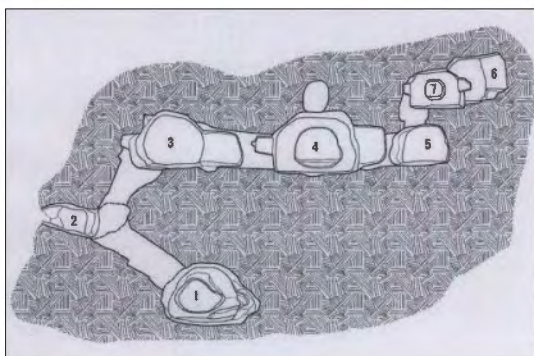


图 13



图 14



图 15



图 16



图 17



图 18

それはバーミヤーン石窟の 330 窟（K 窟）の天井に見られ、ここでは弥勒菩薩として表現されています。われわれが 2006 年に 330 窟を訪れたときは、ちょうど東京文化財研究所の方々が保存作業をしているときでありました（図 19）。チル・ボルジにかろうじて残る壁画の残存例の中にはバーミヤーン壁画の中にもみられる垂れ幕や唐草風の文様もみてとれました（図 20）。

バーミヤーン壁画との類似性を重んずるならば、チル・ボルジ城砦の中にある祠堂群は、もとは仏教寺院であった可能性が出てまいります（図 21）。イスラーム建造物、ひと皮めくれば仏教寺院という構図が浮き上がってくるのです。仏教伝播の研究において今後はイスラーム建造物までも視野に入れねばなりません。

バンデ・アミール川上流域の調査では、ヤッカウラン（Yakwlang）という町が調査の拠点となりました（図 22）。2006 年の調査の折には、今日来ておられるソラビ・バーミヤーン州知事の支援を受け、さらに広域調査を実施いたしました。

まずヤッカウランの南側に注目しました（図 23、24）。ヤッカウランの南、ダライ・アリ溪谷近くに未報告の石窟を確認しました（図 25）。土地ではクシヤゴラ（Qusha Ghola）と呼ばれていました。石窟のある切り立った岩壁の上には望楼が残っており（図 26）、一見すると、バーミヤーン地区のフォラディ石窟を彷彿とさせます（図 27）。

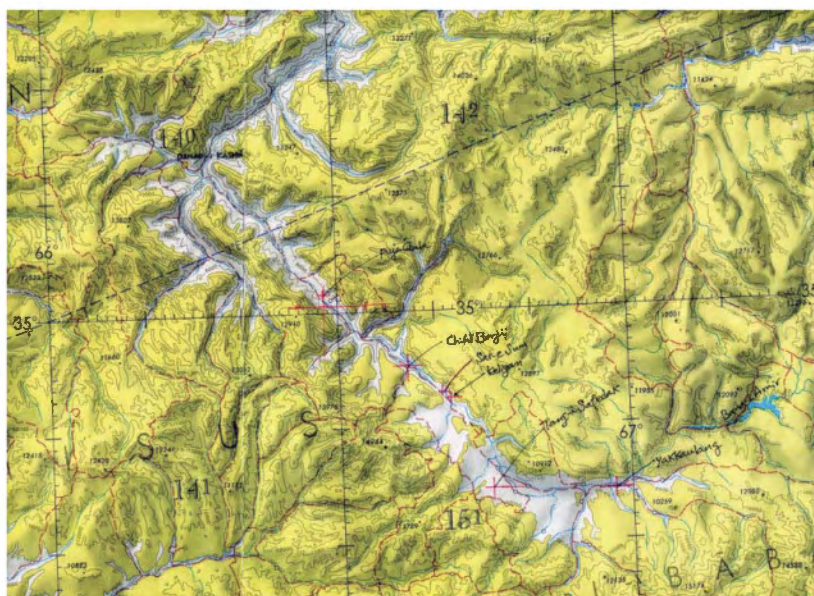


図 22

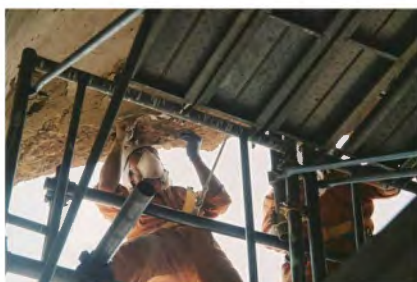


图 19



图 20



图 21



图 23



图 24



图 25



图 26



图 27

クシャゴラ石窟は、異なるレベルに窟が位置していて、東面 A 窟の高い場所に数個の石窟、南面に 5 つの石窟、そして通路も確認できました（図 28、29、30）。

このクシャゴラ石窟のさらに東南 1 km のところにムシュタック（Mushtaq）と呼ばれる石窟があり（図 31）、この石窟もこれまで知られていなかった遺跡です（図 32）。ムシュタック石窟では 7 つの石窟を確認することができました。そのうちのひとつはボールド天井をした主窟と側室から成り（図 33）、奥に龕が設けられていました。類似の石窟はバーミヤーン石窟に見いだすことができ、この龕は仏龕と呼べるものです（図 34）。

2006 年の調査ではバンデ・アミール川に沿って（図 35）、遺跡を探索しました。バンデ・アミール川は途中バルフ川と名前が変わります。バーミヤーン州からサリプル州へ入りました。いまご覧いただいているのは標高 3500m 地点のところです（図 36）。サリプル州にも石窟がいくつか残っていました（図 37）。しかし、いろいろ制約があり、詳しい調査は将来に委ねることとなりました。



図 28



図 29

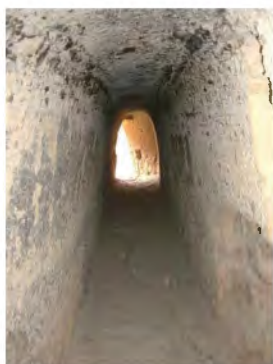


图 30



图 31



图 32



图 33



图 34



图 35



图 36



图 37

2007 年からは情勢悪化でアフガニスタンでの移動調査はできなくなり、トルクメニスタンからアフガニスタン国境に近づく作戦をたてました。アフガニスタンとトルクメニスタンの国境付近、ムルガーブ川流域にやはり石窟が確認できました（図 38、39）。ムルガーブ川の下流に有名なメルヴ（Merv）遺跡があるのです。



図 38



図 39

ここで、われわれのアフガニスタンの遺跡調査に同行してくれたアフガニスタン考古学研究所のケタブ・ハーン・ファイジ氏（図 40）を紹介しましょう。彼は、私たちの調査の後、東京文化財研究所、奈良文化財研究所で研鑽をつみ、将来はアフガニスタン考古学をしょって立つと期待されている人物です。アフガニスタンにおいて文化財関連の人材育成は急務です。日本は人材育成の面で大いに貢献できると思います。



図 40

昨年龍谷大学はアフガニスタン国立博物館館長マスーディ氏、アフガニスタン考古学の第一人者フランス在住のタルジー教授とともにケターブ氏を招聘しました。図向かって左側の人物がケターブ氏、右はマスーディ館長です。龍谷大学でのケターブ氏の報告は私たちに衝撃を与えるものでした。



図 41

カーブル南、ローガル州メス・アイナク（Mes Aynak）で新たに仏教遺跡が見つかったというもので、仏像をはじめとして多くの文物が紹介されました。中国資本による銅山開発の結果、仏教遺跡が姿を表したものです。しかし、資源開発優先で、その仏教遺跡は近く取り壊されてしまう、遺跡の保存に向けて、どうか日本から声をあげてほしいというケターブ氏の声はいまも忘れることはできません。

いまご覧いただいているのは、メス・アイナク遺跡から出土した彫刻です（図 41）。仏教がアフガニスタンで信仰されていた時代、アフガニスタン東部でたいへん流行した仏教図像です。

ここに表現されている図像は、仏教の開祖であるシャーキャムニ・ブッダの前世の物語です。前世のシャーキャムニ・ブッダは青年として表され、前世のディーパンカラ・ブッダに花でもって供養して、青年は「一切衆生のために活動をなす」という誓いをたてます。そのとき、ディーパンカラ・ブッダの前に泥水があり、そのままでは尊いブッダの足が汚れると思い、長髪の髷を切り、髪でもって泥水を覆ったというものです。ディーパンカラ・ブッダはこの青年の誓いが本物であることを見抜き、あなたは生まれ変わって、シャーキャムニというブッダとなるでしょう、という予言を授けたのです。

この物語は古代のアフガニスタンでは架空の物語ではありませんでした。アフガニスタン東部のジェララバード近郊で実際にあった話として伝わっておいりました。その場所が聖地となっていたと中国人僧侶の法顕（5 世紀）・玄奘（7 世紀）は記しています。

真に尊きものを求めて、自らが泥にまみれることをいとわぬ人格を古代アフガニスタンは理想像とかかげたのです。

他者のために命をかける。あらゆる命あるもののために力を尽くす、その誓いがアフガニスタンで重要視されていたことに私は感動を覚えます。

かつて歴史学者アーノルド・トインビーは古代のアフガニスタンを「文明の十字路」と表現しました。さまざまな民族が行き交い、さまざまな言語が飛び交う、それはまさに人類の理想の姿です。

異なる文化がぶつかりあっても、常に衝突するわけではありません。交流、融合がなしとげられたことは、アフガニスタン出土の文化財が証明しています。

アフガニスタンの大地にはまだまだ未知なる遺跡、未知なる文化財が眠っています。遺跡、文化財は過去の人間の営みが生み出したものです。今こそ私たちは歴史に耳を傾けるときです。

カーブルにあるアフガニスタン国立博物館の入口には、「文化と歴史が生き続ければ、国も生き続けることができる」の文章が掲げられています。アフガニスタンが国際社会に発する、じつに象徴的なメッセージです。

自分たちの生きる「今」を理解し、これから進むべき方向を定めるために、私たちは歴史を必要とします。アフガニスタンに残る文化財はまさに歴史の生き証人であり、宗教文物は生きていくうえで何が大切かを私たちに教えてくれます。

バーミヤーンに巨大な大仏が建立されているときに、果たしてそこに紛争があったのでしょうか。かくも巨大な大仏を建立するにはよほどの経済力がなければできません。そしてなりよりほとぼる宗教的情熱がなければ、大仏建立という大事業はできなかったであらうでしょう。

文化遺産を保護していくこと、それが平和の礎をつくる。これは亡くなられた平山郁夫氏の確信でした。すぐれた芸術を作り上げ、芸術文化を遺した人々の熱意に私たちは応えていく必要があると感じています。

私は今日、アフガニスタン情報文化省副大臣、そしてバーミヤーン州知事の前で遺跡調査の概要をお知らせすることができたことを大変嬉しく思っております。調査に際し、多大なご支援を賜ったこと、この場で厚く御礼を申し上げます。

アフガニスタンの抱える問題は、われわれ人類の課題です。アフガニスタンの人々が誇りをもって生きていける環境整備こそ、国際連携でなしとげねばなりません。ひとりでも多くの方がアフガニスタンに、そしてアフガニスタンの文化財に関心をもってほしいと願っております。私の報告は以上です。ありがとうございました。